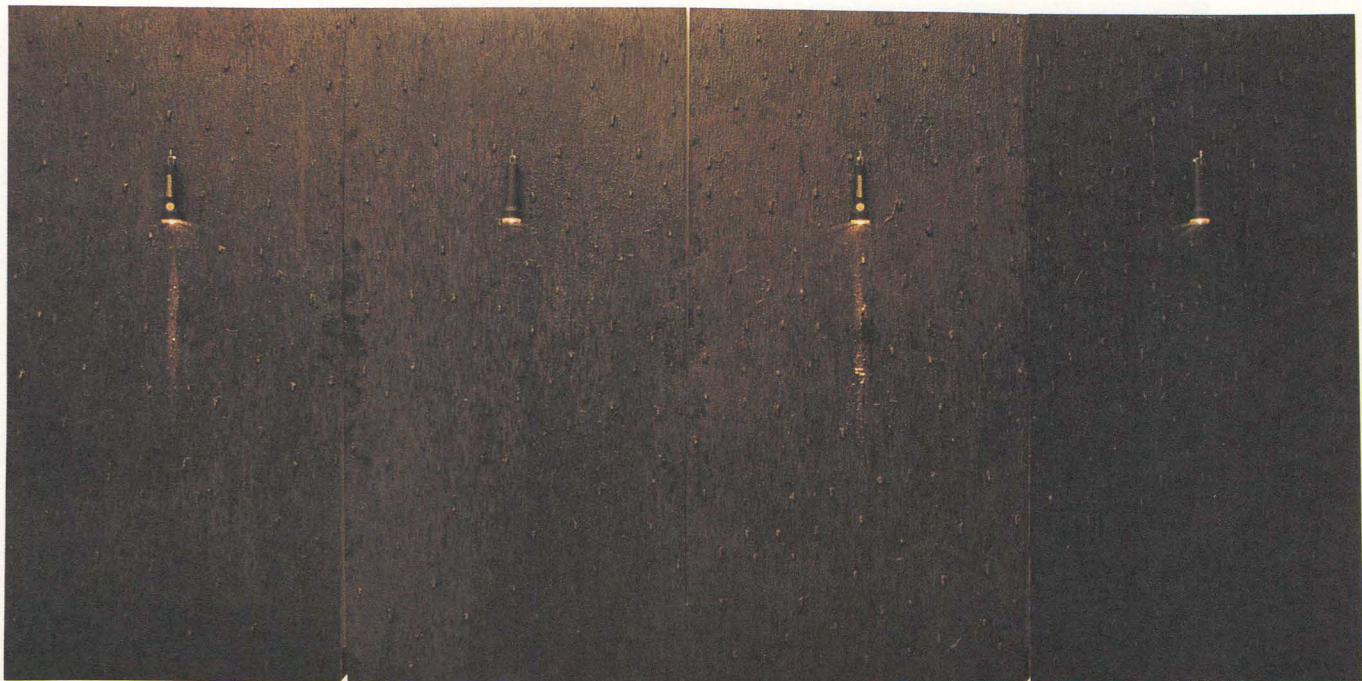
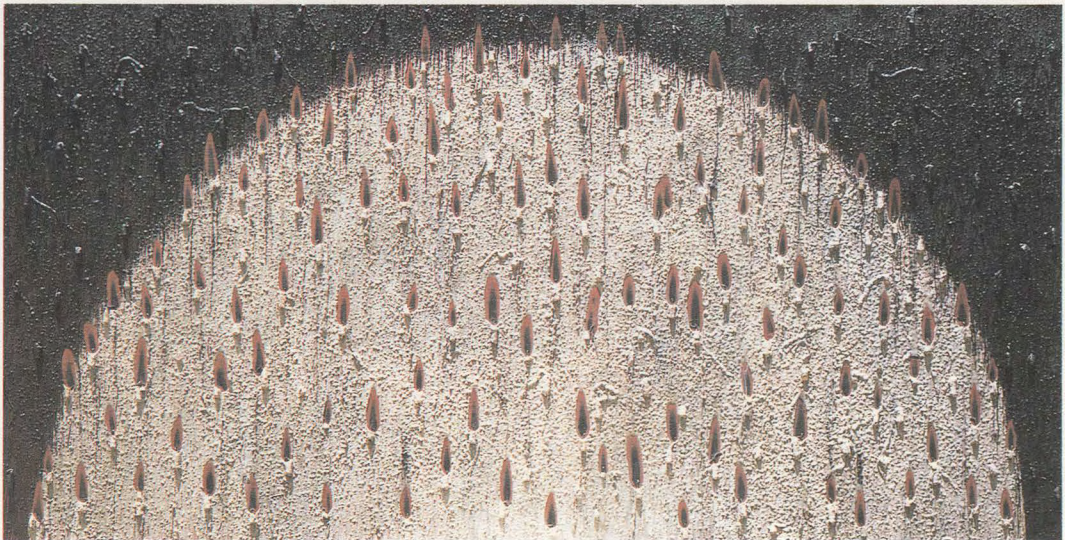
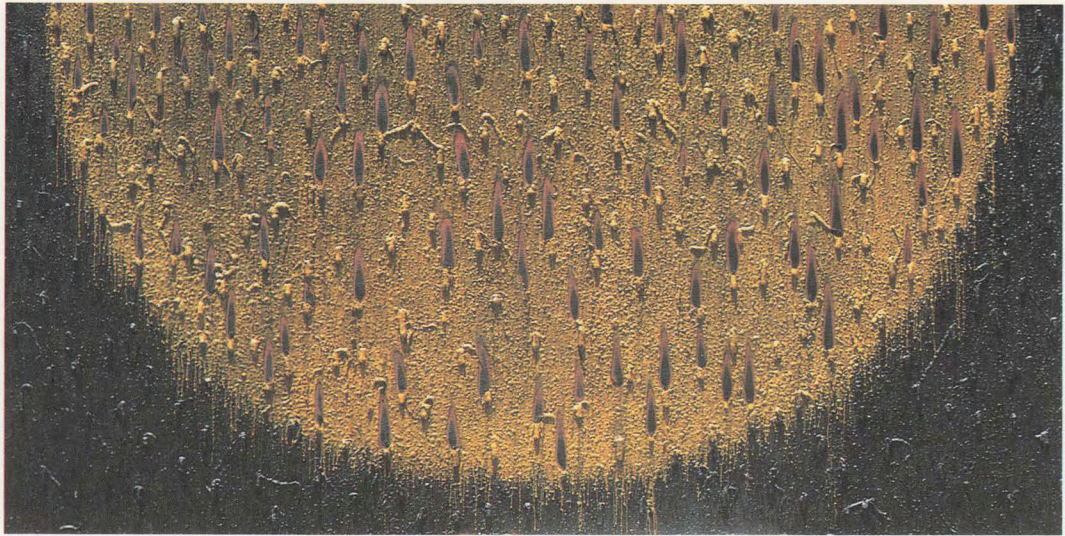


9 水 1991年 H230cm×W300cm×D40cm 土、ライス・ペーパー、テラコッタ
Water 1991 H230cm×W300cm×D40cm soil pigment on rice paper, terra-cotta

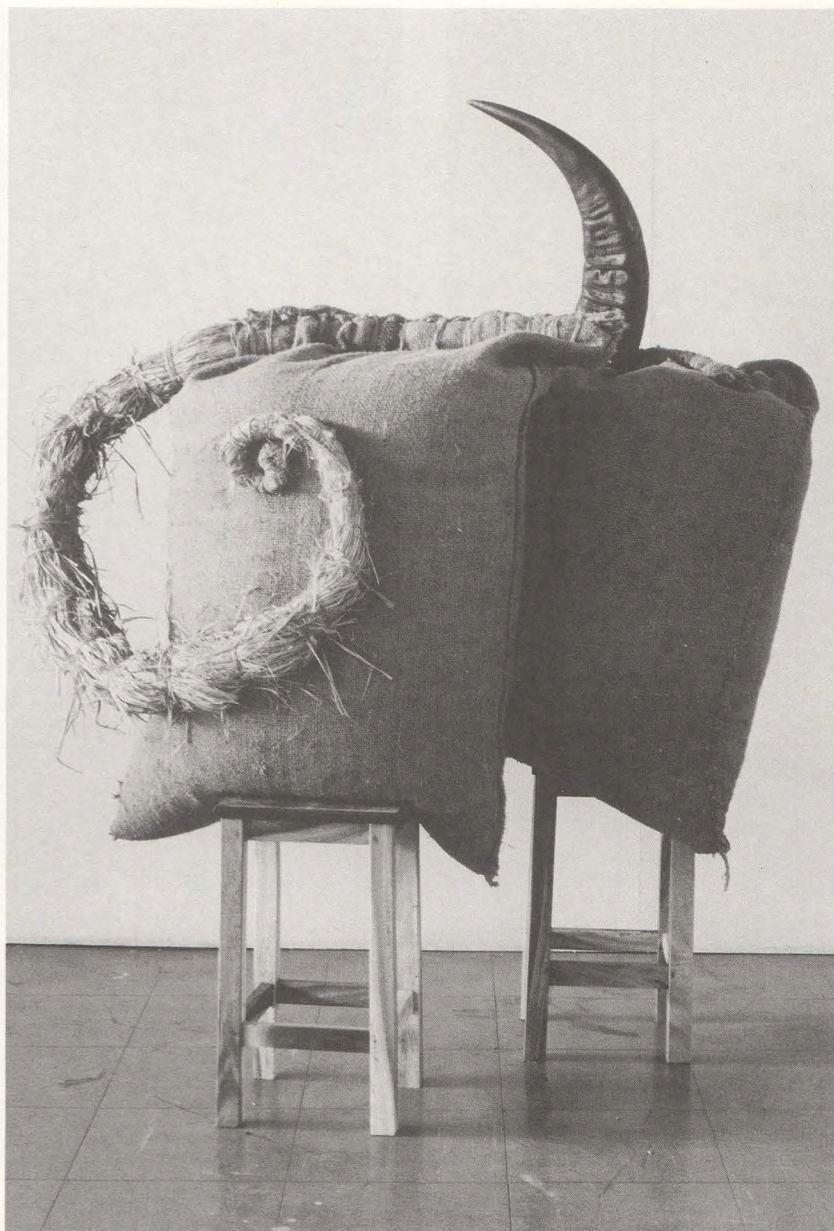


10 黒のキャンドル・カーテン 1991年 H244cm×W488cm×D12cm 蠟燭、木板、懐中電灯
Black Candles Curtain, 1991 H244cm×W488cm×D12cm candles on wood panels, torches

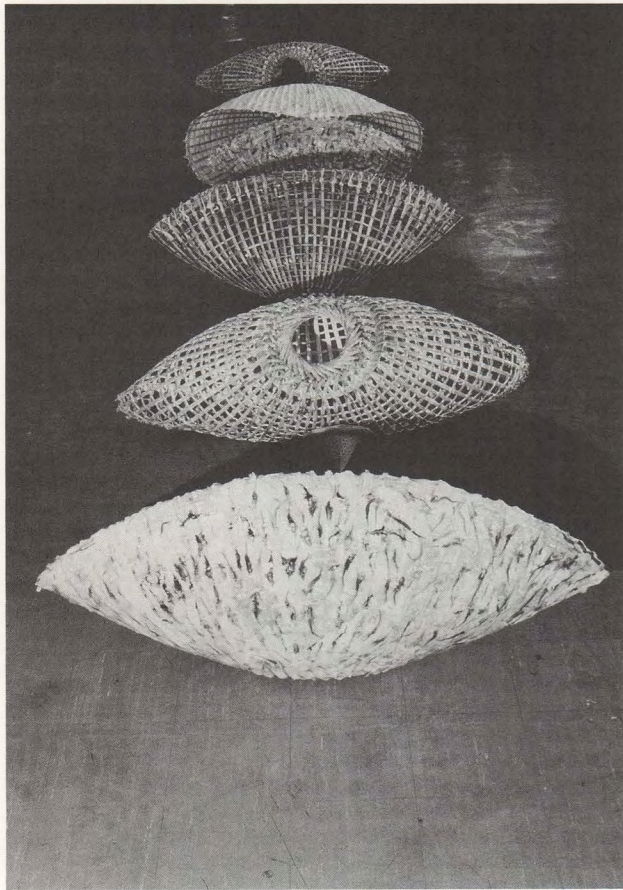


11 キャンドル・ペインティング:満月 1991年 各H122cm×W244cm×D3cm 蠟燭、木板
Candles Painting : Full Moon 1991 H122cm×W244cm×D3cm (each piece) candles on wood panels

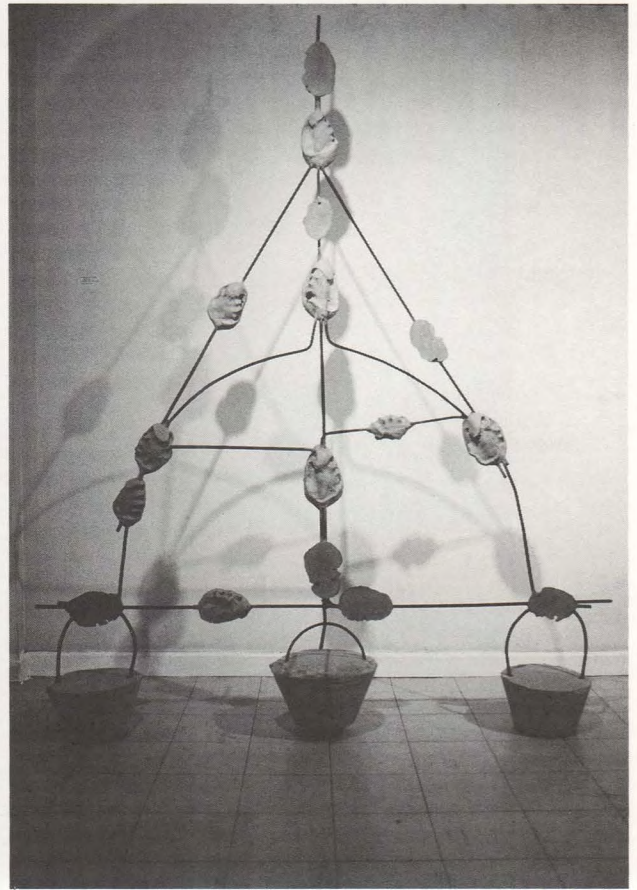
参考作品
Other Recent Works



12 水牛—野から町へ 1988年 H180cm×W160cm×D60cm 脱穀米、穀物袋、水牛の角、腰掛、藁
Buffaloes: From the Field to the Town 1988 H180cm×W160cm×D60cm unhusked rice, sacks, buffalo-horn, stools, straw

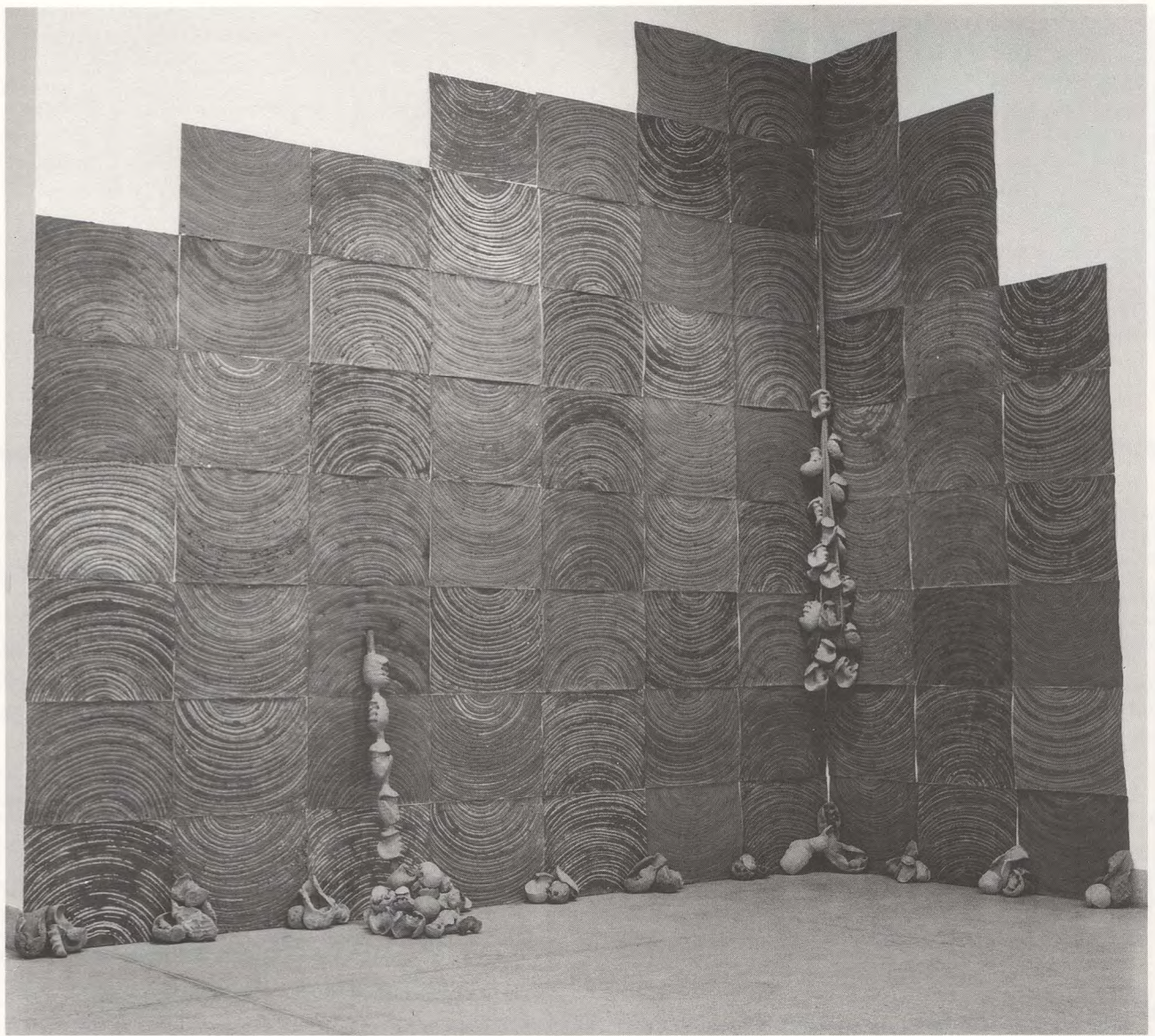


13



14

- 13 初期形態 1989年 H60cm×W130cm×D500cm 鶏籠、羽毛ブラシ、ライス・ペーパー、合成樹脂、紐
 Group of Primary Forms 1989 H60cm×W130cm×D500cm hen-cage, feather-duster, rice-paper, synthetic resin, cord
- 14 ストゥーパ 1990年 H250cm×W220cm×D50cm セメント、鋼鉄
 Stupa 1990 H250cm×W220cm×D50cm cement, steels



15 水田 1991年 H495cm×W650cm×D100cm 土、紙、テラコッタ、魚網、鋤
Manual Traces in the Paddy Field with Fish Net and Spade 1991 H495cm×W650cm×D100cm soil pigment on paper, terra-cotta, fish net, spade

作家略歴
Biography



モンティエン・フンマー

- 1953 バンコクに生まれる
- 1971-73 ポー・チャン美術工芸学校美術学科(バンコク)に学ぶ
- 1974-78 シルパコーン大学絵画・彫刻・版画学部(バンコク)で絵画を専攻、学士号(美術)取得
- 1979-80 シルパコーン大学アート・ギャラリーにデザイナーとして勤務
- 1981-86 チャン・シップ美術大学(バンコク)講師
- 1986-88 パリ国立高等美術学院で彫刻を学ぶ
- パリ第8大学美術学部(サン・ドニ)に学び、修士号(美術)取得
- 1988-現在 チェンマイ大学美術学部講師
- 1989 シルパコーン大学修士号(美術)取得

個展

- 1989 農園からの物語展、国立美術館、バンコク
- 1990 THAIAHT(タイ・タイ)展、国立美術館、バンコク
- 1991 フォルムと素材展、ヴィジュアル・ダーマ・ギャラリー、バンコク

主要グループ展

- 1977 第24回全国美術展、工業省工業促進部、バンコク
- 1980 第26回全国美術展、シルパコーン大学アート・ギャラリー、バンコク
- 1982 第1回現代水彩画展(ホワイト・グループ)、ピラスリ現代美術館、バンコク
- 危機の中の文化展、プリティッシュ・カウンシル・ギャラリー、バンコク
- 1983 タイ現代美術展、ニュルンベルク、ドイツ連邦共和国
- 第29回全国美術展、バンコク
- 第2回現代水彩画展(ホワイト・グループ)、ピラスリ現代美術館、バンコク
- 追悼ニコラ・ブルツィー書票と小さな挿絵展、ポーランド
- 1984 第30回全国美術展、シルパコーン大学アート・ギャラリー、バンコク
- 第3回現代水彩画展(ホワイト・グループ)、ピラスリ現代美術館、バンコク
- ペーパー・ワーク展(20人展)、シルパコーン大学アート・ギャラリー、バンコク
- 第3回アセアン絵画・写真展、アセアン各国巡回
- 現代美術コンペティション1984、ピラスリ現代美術館、バンコク

- 1987 芸術への道展、ナント、フランス
- 第42回サロン・ド・メ展、グラン・パレ、パリ、フランス
- 第6回現代水彩画展(ホワイト・グループ)、バンコク銀行展示ホール、バンコク
- 1988 第43回サロン・ド・メ展、グラン・パレ、パリ、フランス
- 世界現代美術祭、オリンピック公園、ソウル、韓国
- 1989 タイ美術展—伝統と現代、エスパス・ピエール・カルダン、パリ、フランス
- 現代美術コンペティション1989、国立美術館、バンコク
- 外から見た内展(15人展)、アメリカ文化広報交流局ギャラリー、チェンマイ/国立美術館、バンコク
- アジア現代水彩画展、タイ文化センター、バンコク
- 1990 第8回シドニー・ビエンナーレ:レディメイド・ブーメラン展、ニュー・サウス・ウェールズ・アート・ギャラリー、シドニー、オーストラリア
- ウィーン芸術週間:芸術における自然展、メッセ・バラスト、ウィーン、オーストリア
- 9人展、ヴィジュアル・ダーマ・ギャラリー、バンコク
- アジア現代水彩画展、シティ・ホール、香港
- 1991 美術と環境展、シルパコーン大学アート・ギャラリー、バンコク
- プリント・インスタレーション展、国立美術館/国立博物館、バンコク
- タイの精神展(ホワイト・グループ)、国立美術館、バンコク

受賞

- 1984 環境汚染に反対する作品に名誉賞、タイ環境教育協会、チュラロンコーン大学、バンコク
- 現代美術コンペティション(1984)大賞、タイ農民銀行、ピラスリ現代美術館、バンコク
- 1988 世界現代美術祭の作品に選ばれる、ソウル・オリンピック大会組織委員会、ソウル、韓国

Montien BOONMA

- 1953 Born in Bangkok
1971-73 Studied at Poh-Chang School of Arts and Crafts, Fine Arts Department, Bangkok
1974-78 Studied painting at Silpakorn University, the Faculty of Painting, Sculpture and Graphic Arts, Bangkok (B.F.A.)
1979-80 Designer at The Art Gallery, Silpakorn University, Bangkok
1981-86 Instructor in visual arts at Chang-Silp College of Fine Arts, Bangkok
1986-88 Studied sculpture at Ecole Nationale Supérieure des Beaux-Arts, Paris, France
Studied at Université de Paris VIII, Faculté des Arts Plastiques, Saint-Denis, France (Maîtrise Nationale en Arts Plastiques)
1988- Present Instructor in mixed-media's sculpture at Chiang Mai University, the Faculty of Fine Arts, Chiang Mai
1989 Completed the Postgraduate Course in painting at Silpakorn University, Bangkok (M.F.A.)

SOLO EXHIBITIONS

- 1989 "Story from the Farm," National Gallery, Bangkok
1990 "THAIHT (Thai-Thai)," National Gallery, Bangkok
1991 "Form and Material," Visual Dhamma Gallery, Bangkok

SELECTED GROUP EXHIBITIONS

- 1977 24th National Exhibition of Art, Department of Industrial Promotion, Ministry of Industry, Bangkok
1980 26th National Exhibition of Art, Art Gallery, Silpakorn University, Bangkok
1982 1st Contemporary Water Colour Exhibition—White Group, Bhirasri Institute of Modern Art, Bangkok
Culture in Danger, British Council Gallery, Bangkok
1983 Contemporary Art from Thailand, Nuremberg, Federal Republic of Germany
29th National Exhibition of Art, Bangkok
2nd Contemporary Water Colour Exhibition—White Group, Bhirasri Institute of Modern Art, Bangkok
Concours International d'Ex-libris et de Miniatures Graphiques en Memoire à Nikolas Pruzie, Poland
1984 30th National Exhibition of Art, Art Gallery, Silpakorn University, Bangkok
3rd Contemporary Water Colour Exhibition—White Group, Bhirasri Institute of Modern Art, Bangkok
"Paper Work" by 20 artists, Art Gallery, Silpakorn University, Bangkok
3rd ASEAN Exhibition of Painting and Photography
Contemporary Art Competition 1984, Bhirasri Institute of Modern Art, Bangkok

- 1987 "La Rue vers l'Art," Exhibition of School of Fine Arts, Nantes, France
42^{ème} Salon de Mai, Grand Palais, Paris, France
6th Contemporary Water Colour Exhibition—White Group, the Exhibition Hall of Bangkok Bank, Bangkok
1988 43^{ème} Salon de Mai, Grand Palais, Paris, France
Olympiad of Art, Olympic Park, Seoul, Republic of Korea
1989 "Les Peintres Thaïlandais Traditionnels et Contemporains," L'Espace Pierre Cardin, Paris, France
Contemporary Art Competition 1989, National Gallery, Bangkok
"From the Outside Looking In" by 15 artists, the Gallery of USIS, Chiang Mai/National Gallery, Bangkok
Asia Contemporary Water Colour Exhibition, Thailand Cultural Centre, Bangkok
1990 8th Biennale of Sydney "The Readymade Boomerang," Art Gallery of New South Wales, Sydney, Australia
Wiener Festwochen "Von der Natur in der Kunst," Messepalast, Vienna, Austria
"Enneagram-Nine into 9," Visual Dhamma Gallery, Bangkok
Asia Contemporary Water Colour Exhibition, City Hall, Hong Kong
1991 "Art and Environment," Art Gallery, Silpakorn University, Bangkok
"Print Installation," National Gallery/National Museum, Bangkok
"Thai Spirit"—White Group, National Gallery, Bangkok

AWARDS

- 1984 The Honor Award for the work of art against pollution in the environment, the Society of Education in Environment of Thailand, Chulalongkorn University, Bangkok
The Winner Award, Contemporary Art Competition 1984, Thai Farmers Bank, Bhirasri Institute of Modern Art, Bangkok
1988 Selected for Olympiad of Art 1988, the Seoul Olympic Organizing Committee, Olympic Park, Seoul, Republic of Korea

ADDRESS: 408 Soi Tanakarn-Arkarn-Songkroh, 1/3 Ngamwongwan Rd., Nontaburee 11000, Thailand

「タイ人(あるいは、ある特定の民族集団に属している芸術家)は、外国の芸術家の作品を意図的に模倣しない限り、風土、気候、宗教、隔世遺伝的な感情や思考、およびその他の要因によって形成された、その人種の個性を新しいスタイルのもとでもおのずと表現するものである……」

「……同時にわれわれは、西洋美術が近代の精神のみならずアジアやアフリカや古いアメリカの美術の特色をも具現したものであるという事実を見落としてはいない。好奇心に富む西洋人の精神のもとで、中国や日本の絵画の空間認識、インド美術の温かみとバイタリティ、アフリカやアメリカの表現力あふれる作品が融合されて、普遍的な人間の魂を反映した普遍的な概念が生み出されてきた……」

「……作品が真摯に表現されるならば、タイ人の手になる作品は、ヨーロッパ人の手になる作品とは違ったものとなるはずであり、その違いは人種の個性を反映している」¹⁾

上の文章は、タイ現代美術の父とみなされているシルバ・ピラスリ(S.フェローチ)教授が1959年に書いた「タイの現代美術」からの引用である。シルバ教授自身によって1933年に美術アカデミー(のちのシルパコーン大学)が設立されたとき²⁾、講義要項でタイの建築、美術、工芸を毎週学ぶことが学生に義務づけられたのも、おそらくこうした考えがあったことだろう。

西洋流の美術教育が導入されてから16年経った1949年、第1回全国美術展が開かれた。シルバ教授の教えに沿って生み出された美術作品が公開の機会を得たのはこのときだった。翌年開かれた第2回全国美術展は、クリット・プラモート(知識人で政治家)からは「西洋の芸術家のスタイルを模倣した、オリジナリティと個性的な技法に欠ける作品がほとんど」と批評されたものの、シルバ教授は、西洋美術のある程度の影響は普遍的なものともみなされるべきだとして、出展作を擁護した。³⁾

第1回から第14回までの全国美術展(1949～63年)には、彫刻家キエン・イムシリの作品が決まって展示された。キエンの出世作は、安定したフォルムを通して微妙な仕草を表現するスコータイ派(13～14世紀)の古典的仏像の流れを汲むものだった。キエンは、国際感覚溢れる現代的な作品を作り出すことにも長けていたため、伝統的なスタイルに縛られることなくそれをインスピレーションの源として利用した。このことは、たとえば1955年に《無名の政治犯》という題名でロンドンのテート・ギャラリーのコンテストに出品した作品に見てとれる。世界中の5000人にのぼる芸術家が作品を出品したなかで⁴⁾、キエンの作品は最終審査に残り、他の146点の作品とともに展示作品に選ばれた。ちなみに最優秀賞を獲得したのはイギリスの彫刻家レグ・バトラーだった。⁵⁾

国際感覚に富むスタイルと伝統的なスコータイ・スタイルの統合は、たとえば《家族》(1956年)や《二人の姉妹》(1957年)などに見られるように、1956～57年頃の現代タイ・マネリスムの彫刻として見事結実した。

現代的なタイ・スタイルを取り入れた彫刻家としては、あと二人、チット・リエンプラチャー(主として装飾美術や伝統工芸の分野の作品を制作)⁶⁾とシテイデート・センギラン(ただし、広く知られているのは伝統的なタイのライフスタイルを表現した作品一つのみ)がいた。

しかしながら、1971年にキエンが亡くなって以後、現代タイ彫刻は歩みを停止し、したがってその存続期間は、第一世代の時代とみなされるおよそ14年間でしかなかった。

とはいえ、第2回と第3回の全国美術展(1950～51年)においては、サウェン・ソマンミーが優美なポーズをした肉感的な西洋スタイルそのままの裸像を出品して物議をかもした。⁷⁾

第一世代(1959～64年)のタイの画家の手になる印象派風およびキュビズム風の現代絵画が成功を収めるさなか⁸⁾、現代的タイ・スタイルの絵画も秀逸さではひけをとらなかつた。従来のタイの壁画で確立されていた形式的パターンとは対照的に、この先駆的な時期の作品は生活の領域やタイの祭りを軸として展開され、代表作としては、素朴な庶民の精神を反映した日常生活を描いたチャロート・ニムサマーの《ソクラーン》(1956年)や、タイの生活のウィットに富む側面を描いた《ヤシの糖液の採集》(1957年)などがある。⁹⁾

その一方、アンカン・カンヤナポンは、タイの伝統に沿った理想にあくまでもこだわる道を選んだ。アンカンの作品は、タイ仏教の宇宙論「トライ・ブーム

(三界経)にインスピレーションを得て¹⁰⁾、アユタヤ派(14~18世紀)の精神に沿って表現されたものだった。¹¹⁾

第一世代の終わり近く、ダムロン・ウォンウバートは平穩無事な北部の村の情景を描いた一連のテンペラ画(1959年)を発表した。この連作は、生まれ故郷の文化の核心に迫るダムロンの代表作となった。¹²⁾

1964年頃、第一世代の最終グループに属する多くの画家は、さらに研鑽を積むべくヨーロッパへ留学した。したがって、1964~74年の時期にシルバコーン大学を卒業した画家は、現代タイ絵画の制作上の規範から逸脱することはほとんどなかった。この時期の傑出した画家はプラトゥアン・エムチャローンだった。彼の作品は、上流文化、庶民文化いずれの知的価値観にも基づかず、すべての因襲的規範から独立したものだ。彼はイラストの技能を生かして、ブツダの生涯から、田畑、蓮の葉¹³⁾、水等々までにわたるタイの伝統に関係したほとんどすべてのテーマ、ならびに、あらゆる層の人々の心に容易に訴えかけるロマンティックなスタイルの陸や海の風景画に新境地を開いた。したがってプラトゥアンの作品は、独自の手法で成功を収めたわけである。¹⁴⁾

現代タイ絵画の動きは1974年頃に再浮上し始め、活況を呈する経済、コンテストや展覧会を通じて美術が獲得した幅広いパブリシティや重要性、ならびに教育援助といった様々のプラス要因のもとで、現代に至るまで発展し続けている。しかしながら、この16年間(1974~90年)の発展期間の間に新世代すなわち第三世代のアーティストによって生み出された作品は、あらゆる芸術作品が本質的に備えているベキイマジネーションとエッセンスに欠けているようである。作品は次の6つのグループに大きく分類することができる。

1. タイ建築またはその一部を主題にしたもの、あるいは、タイ建築における空間を強調して描いたもの。
2. テーラヴァーダ(小乗)仏教文学に題材をとり、タイ的なモチーフや伝統的な登場人物を取り入れて山や森や海を描いたもの。
3. テーラヴァーダ仏教文学に触発された、またはそのテーマに直接基づいた重要な出来事を描いたもの。
4. タイ建築を中心主題として、自然風景の中で行われる宗教的儀式を描いたもの。
5. 伝統的なタイ壁画から派生したパターンに基づいた手法で描かれたもの。
6. 仏教のマンドラをテーマにしたもの。

その他にも、以上のどの分類にも当てはまらない作品がある。この第三世代で抜きんできた最初の画家は、プリーチャ・タオトーンだろう。1974年以降のプリーチャの絵画は、壁その他の建物の部分に映る光と陰の相互作用を通して、タイの古典的建築の空間的特質を描き出した。1979年にプリーチャは主題を改めて、5番目の分類に移行した。

その一方、1974~82年の時期には、二人の若手画家スラシット・サウコンとブライワン・ダクリアンが中部の古典的なタイ建築と北部(ランナー)のタイ建築(またはそうした建物の一部)を油絵とアクリル画で描いた。¹⁵⁾ スラシットは北部の寺院の雰囲気表現した絵をかき¹⁶⁾、一方、ブライワンの絵は伝統的な事物を表現している。これら二人の画家の作品は、現代的なタイの伝統絵画と言われることもあれば、現代絵画のカテゴリーに属するものと言われることもある。

1974~77年の時期、ボン・センギンはのどかさや風情あふれる川船居住者の生活の情景を描き、シャルムチャイ・コンソットピバンは仏教の形而上学的特質を表現する新しい枠組みのもとで伝統的なタイ・スタイルの絵をかいた。その一方、パンワン・ウィットナサンは自分のタイ絵画にシュールレアリスムの手法を取り入れた。¹⁷⁾ これはどうやら、タウン・ダチャナーから影響を受けてのことらしい。

タウン・ダチャナーは第二世代の画家で、1978年にドイツで開いたトライ・ブームやジャータカ物語や仏教哲学に題材をとった自作の展覧会で評判をとった。彼の絵は、カとエネルギーに満ちていた。人間の姿を用い、想像を絶する生き物や獣がからみ合っ一つの体を形作るその絵は、誕生と生と死の永劫輪廻における貪欲と渴望を表現している。¹⁸⁾

プラソン・ルームアンは、1987年に頭角を現し始めた。彼の作品は、主要なテーマとして、特定の民族社会の文化的アイデンティティを反映した暮らし、祭、儀式、生活様式を描いている。プラソンは、ランナー文化も、自分がその中で暮

らしている現代の文化をも拒絶し¹⁹⁾、1989年にリバー・シティ・コンプレックスで展示された連作(大地と水と共に)に見てとれるようなこうしたコンセプトに沿って作品を制作することに初めて成功した画家となった。²⁰⁾

自己の芸術論に基づく作品をつい最近1989~90年頃から発表し始めたばかりのトゥンチャイ・スウィサクプラサートは、黒と白と金色の様式を通じて、中心を軸に回転する宇宙に存在するエネルギーのダイナミズムを表現している。このタイプの作品にはある種の魅力があるが、しかしまた、あまりに容易に典型的芸術様式となってしまうため、1991年の時点にはトゥンチャイはまるで、生命の動きが緩慢な、マイクロコスモスの世界に没入してしまったかのように思われる。²¹⁾

中国人は、1950年以來、タイ社会の経済、政治、文化において目立った役割を果たしてきた民族集団である。かれらの文化は、アユタヤ派の壁画や、1824~51年のバンコク時代の建築に影響を及ぼしたが、現代美術に登場し始めたのは、1960年から先頃亡くなるまでのチャー・タンの作品を通してにすぎない。チャーンの作品は、表現主義にみられるような、黒の筆づかいのための空白を残すという手法で構成されていた。彼が描いた抽象画と自画像は²²⁾、いずれも、中国文化を十分に意識して制作されたものである。

カンヤー・チャルンサクンは、1985~87年頃に作品制作を本格的に再開した。1972年に中断したところから始めて²³⁾、彼女はサーン・ペーパー(和紙に似たタイの手漉き紙)に筆で描いたり、あるいはリトグラフ的手法を用いた黒インクによる抽象画を引き続き制作し、中国的/日本の印象をもった空間構造を生み出した。《空間のステートメント》(1987年)は、筆さばきと空間構造が互いに密接に関係し合った作品の見本である。²⁴⁾

1989年にもカンヤーはまだそうした作品を制作していたが²⁵⁾、1990年になると新たな展開として色を使用するようになった。テンペラ画や水彩画の現代作品がぼつぼつ描かれるようになり、最終的に、キャンバスにテンペラで描いた連作が完成をみた。これは、従来の中国的ないし日本の感覚よりむしろ、東南アジア的な感覚を備えている。

グラフィックアートが第一世代と第二世代の絵画に果たした役割は小さなものだった。しかし第三世代においては、グラフィックアートは国内、地方、および国際レベルで重要なものとなっている。特に国際レベルでは、タイの伝統的価値観を備えたグラフィックアートはアヴァンギャルドに属するものとみなされよう。

第一世代や第二世代の画家の手になるタイの伝統的価値観を備えたグラフィックアートは、一般に、「人生の印象」という主題(それが伝統的な生活様式であれ、仏教哲学から解釈された生き方であれ)に基づいたものだった。1949~63年に制作されたチャロート・ニムサマーのグラフィックアート作品はすべて、じっと考え込むポーズの女性を描くことによって、「(人生につきまとう)憂いに満ちた気分」を映し出している。

その一方、マニット・プアラーは、タクロー遊びや闘鶏といった、人々の活気溢れる暮らしを描いた。彼の描く女性は、たとえ一人で花を生けている姿を描いても、何かを喋りたがっているように見える。マニットは1958年から作品を制作し始めたが、1963年以降は専作となっている。

インソン・ウォンサムは、1960年に北部の建築から始めて人生の神秘的な側面を描いて成功を収めたが、創作活動は短期間に終わった。一方、サン・サラコンポリラックは、《旧友》(1963年)や悲痛な《事物の領域》(1965年)などに見られるように、老人の観点から人生を切り取ってみせた。²⁶⁾

1962年、プラヤット・ボンダムは生の形而上学を作品に取り入れ、猫、水牛、ヤモリその他の爬虫類などの動物を描くことによって²⁷⁾、様々な思想や意味を表現した。1965~66年、ポテ・サンガウォンは、無限に逆巻く波の動きによって表現された大洋の深みから浮かび上がる餓鬼(プリタ)を描くことによって、トライ・ブームの説くロカンタラ地獄において餓鬼が味わう責め苦を表現した木版画を制作した。²⁸⁾

それから17年後、アーティストたちは人間の描写によらずに「人生の印象」を表現する方法を模索し始めた。ボンデート・チャイヤクットはエッチング技法を用いて《静物No.28》(1983年)を制作した。古い食器棚に並ぶアンティークの銀器を描いたこの作品は、今やすでに過去のものとなったタイのきわめて洗練されたライフスタイルの雰囲気をかもしだしている。さらに1987年には、ウィジット・アピチャートクリエンクライが、まるで空中の島のごとき盛土の上に位置